

原坦山『大乘起信論要義七門』について

佐藤 厚

【要旨】原坦山『大乘起信論要義七門』は、一八八〇年（明治一三）の東京大学図書館の目録には写本一巻と記載があるが現存しない。本稿で扱った駒澤大学図書館所蔵本は明治十五年四月という記載がある印刷本で、曹洞宗の能仁雲外（雲外見性）が印刷し所蔵したものを、北野元峰が所蔵していたものである。内容は九紙からなる小冊子で、『大乘起信論』の重要箇所七門を挙げている。七門とは大乘名義、真如体性、生滅三大、諸心所依、觀境邪正、修証階差、対文解釈である。この中、諸心所依と対文解釈の二門には文があるが、他は法藏『大乘起信論義記』の丁数を挙げて指示するに留まる。諸心所依では仏典中に説かれる心と心臓とを同一視する記述への批判が行われ、対文解釈の注釈は一八八五年（明治一八）刊行の『大乘起信論両訳勝義』の頭注に用いられている。小冊子のためこれまで本格的な研究は行われてこなかったが、原の『大乘起信論』觀、仏教觀を窺う重要な資料である。

一 はじめに

原坦山（一八一九—一八九二）は江戸時代末期から明治時代中期に活動した曹洞宗僧侶で、一八七九年（明治一二）から東京大学で最初に仏教学講義を行った人物である。原は、仏教における人間の迷いと悟りの仕組みを身体論で説明する。それを『大乘起信論』（以下『起信論』）に基づく淨覺、不覺、和合という三心説で説明したほか、『起信論』の講義、研究を行い、一八八五年（明治一八）には真諦訳、実叉難陀訳を合採した『大乘起信論両訳勝義』を刊行している。このように原と『起信論』の関係は密接である。

筆者は近年、原の東京大学における講義の研究をしており、さらに『起信論』を中心とする原の思想を解明しようとしている

る。¹ 前稿では『大乘起信論両訳勝義』の頭注の内容をもとに原の『起信論』観を探った。² 要約すれば、頭注は全部で五十箇所あり、注釈に用いた典籍としては『釈摩訶衍論』が最も多いということが明らかになった。『釈摩訶衍論』といえは龍樹造とされ、『起信論』の注釈書という体裁を持ちながらも独特な思想を説く論書である。日本では空海が真言宗所依の典籍として重視し、中国では遼代に研究され注釈書が作られた。近年では新羅撰述説も出されている。こうした典籍を原が重視するのは注目される。

今回さらに原の『起信論』観研究をすすめるために着目したのは『大乘起信論要義七門』（以下本書）である。本書は一八八〇年（明治一三）の東京大学図書館の目録に名前が挙げられており、原の講義との関連が想像されるが、全集にも収録されておらず内容がわからない。先行研究として、望月信亨は『大乘起信論之研究』（金尾文淵堂、一九二三年）の中で次のように述べている。

要義七門は著者が起信論中、要義と認めたもの七門を挙げ、之を略述したるものに係る。七門とは大乘名義、二に真如体性、三に生滅三大、四に諸心所依、五に觀境邪正、六に修証階差、七に對文解釈なり。就中、諸心所依、及び對文解釈の二門には述釈あるも、他は唯だ義記の証文を指示するに過ぎず。

近年では明治哲学の現象即實在論を研究した渡部清が言及するが、内容まで立ち入っていない。⁴ こうした中、筆者は駒澤大学図書館で本書を閲覧することができたので、本稿ではその内容と特徴を報告する。

二 書誌情報と成立

（一）書誌情報

筆者が駒澤大学図書館で調査した本（以下、駒大本）の書誌情報をまとめる。目録の検索結果には次のようにある。

大乘起信論要義七門／原坦山述

〔東京〕：能仁雲外、一八八二・四

六階 特別資料庫 二二七四・一、四六

実際、本書を見てみると、本文は八紙からなっており、活字印刷である。製本されて表紙が付いている。大きさは縦二十二cm、横十五・五cmである。表紙には手書きで次の三行が記されている。

明治十五年四月

大乘起信要義

雲外見性

内題には「原坦山大乘起信論要義七門」、著者名には「曹洞宗専門本校教師原坦山述」とある。印は、「北野元峰禪師寄贈」、「元峰藏書」、「駒澤大学図書館蔵」がある。最後の第八頁には「摺出發起者 能仁雲外」とある。

以上から次のことがわかる。駒大本は一八八二（明治一五）に製本されたものである。本来の所蔵者は雲外見性であり、彼は「摺出發起者 能仁雲外」と同一人物と考えられる。雲外見性は幕末から明治期の曹洞宗僧侶と考えられるが詳しい伝記はわからない。牆外道人（高田道見）によれば、能仁雲外が一八八三年（明治一六）に駒込吉祥寺で寮主を務め『輔教篇』を講義し、その後、尾道の天寧寺に住したという。また一九〇二年（明治三五）には、広島市の國泰寺認可僧堂擔當師として衆僧十五六名を伴い神応院に出張した記録が伝わる。そして一九一三年（大正二）四月八日には能仁雲外を撰者として「新撰

洞上仏事錦囊」一巻を編んでいる。この中、一八八三年の記述に着目すると、これは駒大本が出来た翌年のことである。ここから想像されるのは、当時、能仁雲外は学生ではなく、学生を指導する立場にあり、その中で本書の印刷を行ったということである。のち幕末から昭和時代前期にかけて活動した曹洞宗の北野元峰（一八四二—一九三三）の手にするところとなり、後に駒澤大学図書館の蔵書となった。

内題から本書の正式名称が「大乘起信論要義七門」であることがわかる。さらに著者名に「曹洞宗専門本校教師原坦山述」とあることから、原坦山が曹洞宗専門本校で教授していたものであることがわかる。『大雄山誌』（六一頁）によれば、原は一八八一年（明治一四）四月一日に曹洞宗専門本校教師を命ぜらるゝとあることから講義で使用了ものであることがわかる。原が東京大学で講義を始めるのが一八七九年（明治一二）であり、その二年後から曹洞宗専門本校でも授業を行っていたことがわかる。

（二）成立

続いて成立について考えてみたい。本書の正式な制作年代はわからない。現在我々が知ることが出来る最も古い記録が前述した一八八〇年（明治一三）の東京大学図書館の目録である。そこには「大乘起信論要義七門（原坦山述）一巻 写本 一本」とある。ここには写本とあることから、当初は原坦山の手書きであったと考えられる。それを明治一五年（一八八二）に能仁雲外が印刷することを発起し、駒大本になったものと推測される。

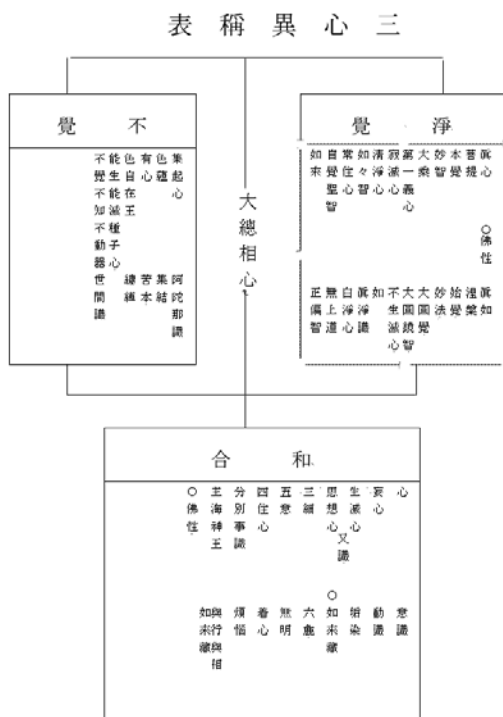
三 内容

続いて内容を紹介する。全九頁からなる。

（一）「三心異称表」

最初に「三心異称表」が掲げられる。これは「大総相心」という語を中心に置き、その右側に淨覚、左側に不覚、下に和合

〈図1〉三心異称表



不覺の杵には、集起心、阿陀那識、色蘊、集結、有心、苦本、色自在王、纏縛、能生能滅種子心、不覺不知不動器世間識の

一〇個の語を並べる。

和合の枠には、心、意識、妄心、動識、生滅心、垢染、思想心、如来藏、三細、六塵、五意、無明、四住心、着心、分別事識、煩惱、主海神王、与行与相如来藏、仏性の一九個の語を並べる。この中、如来藏と仏性の語の上に○が付いている。

続いて内題、著者名に続いて

大乘名義第一

真如体性第二

生滅三大第三

諸心所依第四

觀境邪正第五

修証階差第六

対文解釈第七

の七項目が説かれる。以下、原文を掲げるが、文章がある場合には、標点を付した原文と試訳、典拠を掲げる。カッコ内は割注である。

（二）大乘名義第一

大乘名義第一（起信論義記之牒符）

【原文】有名無実、則為空名（如龜毛兔角）、有義而無体、則為虚理（如須弥地平説）、皆無益於実学故、立名義者、要称其实故、掲之証実義。（従上三十八表至全四十丁）

【試訳】名があつて実がなければ空しい名である（亀の毛、兎の角のようなものである）。義があつて体がなければ虚ろな理である（須弥山世界における地が平らであるという説のようなものである）。「これらは」みな実学において無益なものである。故に名と義を立てるのは、その実を称えるのに必要である。故にこれを掲げて実の義を証する。（上三十八表から全四十丁に至る）

【典拠】『起信論義記』「上三十八表」は大正蔵四四・二五〇中。『起信論』本文では「已説因縁分。次説立義分。摩訶衍者総説有二種。云何為二。」にあたる。「全四十丁」は大正蔵四四・二五一上。『起信論』本文では「一切菩薩皆乘此法到如來地故。」にあたる。『起信論義記』は一六九九年（元禄十二）刊行の上中下三冊本である。

（三）真如体性第二

真如体性 第二は

証文（中本三丁至全九丁）

とだけある。証文の典拠を掲げる。

【典拠】『起信論義記』「中本三丁」は大正蔵四四・二五二上。『起信論』本文では「心真如者、即是一法界大総相法門体。」にあたる。「全九丁」は大正蔵四四・二五四中。『起信論』では「以離念境界唯証相応故。」にあたり、真如門の終わりまでである。

（四）生滅三大第三

生滅三大 第三は

原坦山『大乘起信論要義七門』について（佐藤）

原坦山『大乘起信論要義七門』について（佐藤）

一二四

証文（中本十丁表至下本三十丁裏）

とある。証文の典拠を掲げる。

【典拠】『起信論義記』『中本十丁表』は大正蔵四四・二五四中。『起信論』本文では「心生滅者、依如来蔵故、有生滅心。」。「下本三十丁裏」は大正蔵四四・二七六上。『起信論』本文では「真如自体用義故。」までにあたる。

（五）諸心所依第四補闕

諸心所依第四補闕は、これまでとは違い論述の形式となっている。
まず

【原文】通遍動靜万類、別在有情之身内、

【試訳】通じては動靜万類すべてのものに遍満するが、特別には有情の身の内にある。

と述べて心の所在を問題とする。以下、三つの仏典の中から「こころ」を心臓としている箇所を挙げ、自ら批評を加える。

①『撰大乘論』

世親造、真諦訳『撰大乘論釈』を引用する。最後のカッコ内が原坦山の批評である。

【原文】撰論曰（四十五局十八丁）、五臓中心臓其中有孔、意識在此孔中云云（此説無妨、然特言在心臓孔中者非通論也）、

【試訳】『撰大乘論』にいう（四十五局十八丁）、「五臓の中の心臓のその中に孔がある。意識はこの孔の中にある。云云」（この説は妨げがない。ところで特に「心臓の孔の中に在る」と言うのは通論に常識的な論ではない。）

【典拠】…世親造、真諦訳『撰大乘論釈』巻第五（大正蔵三二・一八五中）「論曰。遠行及独行、無身住空窟、調伏難調伏、則解脫魔縛。釈曰。能縁一切境界故名遠行。無第二識故、名独行。無身有二義。一無色身。二無生身。身内名空窟。識在身内故名住空窟。二五蔵中心蔵其中有孔。意識在此孔中故名住空窟。」の傍線部。

②「雜華嚴經一乗修行者秘密儀軌」

続いて『宗鏡録』に引用された「雜華嚴經一乗修行者秘密儀軌」を引用する。ここでは原の批評をはさんで前後半に分けて引用する。

まず前半部である。

【原文】雜華嚴經一乗修行者秘密儀軌曰、一切衆生自心処内有八弁和合成蓮華。此蓮華中有正偏知海。是名毘盧遮那智蔵。亦名蓮華蔵莊嚴世界海。（以心臓為自心所依者、憶測付会固不足取、雖然、以毘盧智蔵及蓮華蔵世界海、為心法之異名者、大得仏意。）

【試訳】『雜華嚴經一乗修行者秘密儀軌』にいう。「一切衆生の自心処の内に、八弁がある。和合して蓮華となる。この蓮華の中に正偏知海がある。これを毘盧遮那智蔵と名づけ、また蓮華蔵莊嚴世界海と名づける。（心臓を自心の所依とするのは憶測、付会であり固より取るに足らないものである。しかし、毘盧智蔵と蓮華蔵世界海とを心法の異名とするのは大いに仏意を得ている）」

【典拠】延寿『宗鏡録』卷二八「一切衆生自心処内有八弁、普反即一切衆生心腹内有八弁為華五蔵。其八弁相狀。一似牛黃也。和合成蓮華。此蓮華中有正遍知海。是名毘盧遮那智蔵。亦名蓮華蔵莊嚴世界海。」（大正蔵四八・五七六下―五七七上）の傍線部。正偏知海は曷良耶舍訳『仏說觀無量壽仏經』（大正蔵一二・三四三上）に「是心作仏是心是仏、諸仏正遍知海從

心想生。」とある。毘盧遮那智藏は闍那耶舍訳『大乘同性經』に「如是一切諸法皆悉流入毘盧遮那智藏大海」（大正藏一六・六四九下）とある。

続いて後半部。

【原文】此海有三種波者。一業相。二転相。三現相。然此蓮華藏海。有二種門。一大藏金剛門。二差別金剛門。然凡夫華未開發。聖者華已開發。此未開發華上有九孔。名差別金剛門。此華茎上有一大孔。名大藏金剛門。凡衆生業將起。從大藏門風起飄動心海。乃至涌出差別門中已後。眼等五根面上。乃至諸根中周流。不知手舞足踏手擎足擾動初發微細。是名業相。諸仏境界。（次漸僊涌出差別門。未現面貌。是名転相。諸菩薩声聞緣覺境界。）後於諸根貌面中、顯現善惡相極僊。是名現相。諸凡夫境界。（宗鏡二十八局十六丁引之）

【試訳】この海に三種の波があるとは、一には業相、二には転相、三には現相である。この蓮華藏海に二種の門がある。一には大藏金剛門、二には差別金剛門である。凡夫の華は未開發であり、聖者の華は已開發である。この未開發の華の萼の上に九つの孔がある。これを差別金剛門と名ける。この華の茎の上に一つの大孔がある。これを大藏金剛門と名ける。およそ衆生の業が起ろうとするとき、大藏門から風が起つて心海を飄動する。乃至、差別門の中に涌出して已後、眼等の五根の面上、乃至、諸根の中に周流し、「本人が」意識せずに手が舞い足が踏み、手が擎（ささ）げ足が擾動する。初めの微細を起すこと、これを業相と名ける。「これは」諸仏の境界である。（次に漸僊涌出差別門。未だ面貌に現れない。これを転相と名ける。諸の菩薩、声聞、緣覺の境界である。）後、諸根の貌面中において善惡相極僊が顯現する。これを現相と名ける。諸の凡夫の境界である。（宗鏡二十八局十六丁引之）

【典拠】延寿『宗鏡録』卷二八「此海有三種波者、一業相、二転相、三現相。然此蓮華藏海、有二種門。一大藏金剛門、二差別金剛門。然凡夫華未開發、聖者華已開發。此未開發華上有九孔、名差別金剛門。此華茎上有一大孔、是名大藏金剛門。凡衆生業將起、從大藏門風起飄動心海、乃至涌出差別門中已後、眼等五根面上、乃至諸根中周流、不知手舞足踏手

撃足擾動。初發微細、是名業相、諸仏境界。次漸麁涌出差別門、未現面貌、是名轉相、諸菩薩聞緣覺境界。後於諸根貌面中顯現善惡相極麁、是名現相、諸凡夫境界。」（大正藏四八・五七七上）

続いて原のコメントである。

【原文】是雖論所依、未詳本末源支、予心識論、具明之、

【試訳】これは所依を論じてはいるが、いまだ本末、源支を詳らかにしていない。私の『心識論』には具体的にこれを明らかにしている。

【典拠】『心識論』は原坦山の著作で、一八六〇年（安政六）本と一八六九年（明治二）本と二本が作られた。これらは『坦山和尚全集』収録されている。詳細は後章でふれる。

③『大日經疏』

『大日經疏』から三か所を引用する。まず第一の引用である。

【原文】又大日經疏（十一）云、行者於此処、思蓮華形、乃至汗利陀、訖利陀、一名転耳。

【試訳】また『大日經疏』（十一）に云う、「行者、この処において蓮華の形を思え。乃至、汗利陀、訖利陀。一名転ずるのみ」と。

【典拠】未詳

続いて第二の引用である。

原坦山『大乘起信論要義七門』について（佐藤）

【原文】 又（三）凡人汗栗陀心（是古訳梵語訛、正梵音云紀哩駄耶、此云心）、状如蓮花合而未敷之像、有筋脉約之以成八分、男子上向、女人下向。

【試訳】 また（三）「にいう」。「およそ人の汗栗陀心（これは古訳の梵語の訛である。正しい梵音には紀哩駄耶という、ここでは心という。）の形状は、蓮花が合わさっているがいまだ敷いていない像のようである。筋脉があり、これに約して八分を成している。男子は上向き、女人は下向きである。」

【典拠】 一行記『大毘盧遮那成仏経疏』卷四、「即観自心作八葉蓮花。阿闍梨言。凡人汚栗駄心。状猶如蓮花含而未敷之像。有筋脉約之以成八分。男子上向女人下向。先観此蓮令其開敷。為八葉白蓮花座。此台上当観阿字。作金剛色。首中。置百光遍照王。」（大正蔵三九・六三三上）の傍線部分。

続いて第三の引用である。

【原文】 又曰、一切衆心清浄、而以無明蔽塞不能了知。若浄其心即曼荼羅也。以方便修定、其心漸浄、以心浄故阿字現中、阿字即一切諸仏之心也。

【試訳】 またいう、「一切衆心は清浄であるが、無明が蔽塞するので了知することができない。もしその心を清めれば曼荼羅である。方便修定によつてその心が漸く浄まる。心が浄いから阿字が中に現れる。阿字とは即ち一切諸仏の心である。」【典拠】 一行記『大毘盧遮那成仏経疏』卷二、「心外無別法也。所以者何。此漫荼羅名之為浄。以一切衆生自心、本来清浄。而以無明蔽覆、不能了知。若浄此心。即是漫荼羅也。不從余処来也。行及果報皆亦如是。以一切万法乃至形顯等色万類差別。莫不從心分別而有。今此阿字門亦不從外来。但從心生無別以有方便修定故。其心漸浄。以心浄故。阿字現中。此阿字者。即是一切諸仏之心。」（大正蔵三九・七〇五下）の傍線部分。

最後にこの項目を総括する文である。

【原文】 是皆以心藏為心之所依、固不足取。予心識論実験録、具弁之、以補經論闕典、

【試訳】 これらはすべて、心藏を心の所依としているから取るに足りないものである。私の『心識論』、『実験録』に具体的にこれを弁じている。これによって經論の闕典を補なう。

【典拠】 『心識論』は前述。『実験録』は原坦山の著『心性実験録』で一八七三年（明治六）に作られた。『坦山和尚全集』に収録される。詳細は次章で述べる。

（六） 觀境邪正 第五

觀境邪正 第五は次の文からなる。

【原文】 觀也機鑑之智用也、四衆四生之見知各異其趣、及諸家判教之宗途紛紜者皆屬之。

【試訳】 觀とは機鑑の智用である。四衆四生の見知はそれぞれ、その趣を異にしている。諸家の判教の宗途紛紜なるものは皆なこれに属す。

【典拠】 『起信論義記』「下末一丁」は大正藏四四・二七六中。『起信論』本文では「対治邪執者。一切邪執。」にあたる。「全五丁左」は分別発趣道相の前までである。

（七） 修証階差 第六

修証階差 第六は次の文からなる。

原坦山『大乘起信論要義七門』について（佐藤）

原坦山『大乘起信論要義七門』について（佐藤）

一三〇

証文（中本十丁至下終）

【典拠】『起信論義記』『中本十丁』は大正蔵四四・二五四中。『起信論』本文では「心生滅者。依如来蔵故有生滅心。」にあたる。「下終」は最後の部分である。

（八）対文解釈第七

対文解釈第七（一之二十五丁右至下終）

【典拠】『起信論義記』『一之二十五丁右』は大正蔵四四・二四五中。『起信論』本文では「大乘起信論 第七釈論題目者。」にあたる。「下終」は最後の部分である。

ここでは「如実」から始まり、「他方仏土」に至るまでの四十一項目について註が付けられる。例えば次のようである。

○如実（上之三十一丁左） 釈云（釈者指釈摩訶衍論、後皆倣之）妙覺地有真実僧（一之十六丁右）

これは「如実」という語句に対する説明である。説明に際して、「釈云」と述べるのは『釈摩訶衍論』を指す。そこに「妙覺地有真実僧」という言葉がある。これらの注釈は、ほぼ『大乘起信論両訳勝義』の頭注と同じである。つまり本書の註をもとにして後に『大乘起信論両訳勝義』の頭注が作られたと考えられる。

四 特徴的部分の考察

以上、本書の内容を見てきた。続いて特徴的な部分を考察し、最後に撰述意図について考察してみたい。

(一) 三心異称表

第一に「三心異称表」をとりあげる。これは前述したように、浄覚、不覚、和合の異称を挙げるものであった。内容をもう一度記せば次のようになる。

浄覚の枠には、真心、菩提、本覚、妙智、大乘、第一義心、寂滅心、清浄心、如々智、常住心、自覚聖智、如来、真如、涅槃、始覚、妙法、大円覚、大円鏡智、不生滅心、如々、真浄識、白浄心、無上道、偏智、仏性の二三五個の語を並べる。この中、仏性の語の上に○が付いている。

不覚の枠には、集起心、阿陀那識、色蘊、集結、有心、苦本、色自在王、纏縛、能生能滅種子心、不覚不知不動器世間識の一〇個の語を並べる。

和合の枠には、心、意識、妄心、動識、生滅心、垢染、思想心、如来蔵、三細、六塵、五意、無明、四住心、着心、分別事識、煩惱、主海神王、与行与相如来蔵、仏性の一〇個の語を並べる。この中、如来蔵と仏性の語の上に○が付いている。

これらは浄覚、不覚、和合の枠組みに入る仏教用語を集めたものである。この中で注目されるのは和合で説かれる「主海神王」、「与行与相如来蔵」で、これらは『釈摩訶衍論』で説かれる概念であり、ここにも原坦山の『釈摩訶衍論』重視の姿勢がうかがえる。

三心は『起信論』に基づく原の仏教身体論の根幹をなすものである。これについては(三)で述べる。

(二) 章立て

第二に、章立てに注目する。大乘名義から始まる七門は、第四の諸心所依を除き、『起信論』全体にわたって要点とされる部分を挙げていることがわかる。ここで第四を除いた六門を『起信論義記』の内容と対応させると〈表一〉のようになる。

〈表一〉

『大乘起信論義記』		一大乘 名義	二真如 体性	三生滅 三大	五觀境 邪正	六修証 階差	七對文 解釈
上卷二五	「釈題目」 大乘起信論						○
三八	「立義分」 摩訶衍者総説有二種	○					○
四十	到如来地故	○					○
中卷三	「解釈分」 心真如者即是一大		○				○
十	心生滅者依如来藏故			○		○	○
下卷末一	「対治邪執」			○	○	○	○
五	「分別発趣道相」					○	○
終						○	○

大乘名義第一では、試訳を示すと「名があつて実がなければ空名となる（亀の毛、兎の角のようなものである）。義があつて体がなければ虚理となる（須弥山世界における地が平らであるという説のようなものである）。（「これらは」みな実字において無益なものである。故に名と義を立てるのは、その実を称えるのに必要である。故にこれを掲げて実の義を証する。」とあつたように、ものごとの明確な実を示すことを説く。『起信論義記』で挙げる部分は「摩訶衍者総説有二種。」で始まる立義分の箇所である。

真如体性第二は具体的な説明がなく、『起信論』の真如門の典拠だけが挙げられていた。

生滅三大第三も具体的な説明がなく、『起信論』の生滅門の典拠だけが挙げられていた。

諸心所依第四は、直接的に『起信論』と関係しないが重要な部分なので次項目で述べる。

観境邪正第五は、前には「観とは機鑑の智用である。四衆四生の見知はそれぞれ、その趣を異にしている。諸家の判教の宗途紛紜なるものは皆なこれに属す。」と試訳してみたが、意味が取りにくい。内容的には『起信論』の対治邪執の部分が挙げられていた。

修証階差第六は、名称からすると修証に機根による差があることを意味していると考えられるが具体的な説明がないのでわからない。証文は『起信論』の心生滅の部分から最後までが挙げられていた。

対文解釈第七は前述したように、原坦山の起信論の語句に対する注釈である。

(三)「諸心所依第四補闕」について

第三に、七門中で「諸心所依第四補闕」が、最も文が多いところであった。よってこの部分が原の力説したかった部分と考えられる。内容は、仏典中、物理的な心臓を描写するものを三種あげ批評を加えていた。

第一に、世親造、真諦訳『撰大乘論釈』巻五の記述では、心臓の中に穴があり、その中に意識があると説いていた。これに対して原坦山は、この説は妨げがないが、心臓の穴の中にあるというのは常識的な論ではないとしている。

第二に、延寿『宗鏡録』に引用された「雜華嚴經一乗修行者秘密儀軌」である。前半部では、まず一切衆生の心に八葉の蓮華があるといい、その中に正偏知海があるという。これを毘盧遮那智蔵、蓮華蔵莊嚴世界海と名づけるという。これに対して原は、心臓を自心の所依とするのは憶測であり取るに足らないと批判する。一方で、毘盧智蔵と蓮華蔵世界海とを心法の異名とするのは大いに仏意を得ているという。

後半部では、前の正偏知海に三種の波があるといい、それが一には業相、二には転相、三には現相であるという。これは『起信論』教理の援用である。また蓮華蔵海に大蔵金剛門、差別金剛門という二つの門があるという。さらに凡夫の華は未開發、聖者の華は已開發とし、未開發の華の萼の上に九つの孔があり、それが差別金剛門であるという。またこの華の茎の上に一つの大きな孔があり、それを大蔵金剛門と名ける。衆生の業が起さる時、大蔵門から風が起こって心海を揺らし、さらに差別門

の中に湧き出して、眼などの諸根にいきわたるといふ。この中、初めの微細を起こすことを業相といい、諸仏の境界である。次にいまだ面貌に現れないものを漸庵涌出差別門といい転相と名ける。これは諸の菩薩、声聞、縁覚の境界である。後に、諸根の貌面中において善悪相、極庵が顕現するのを現相と名け、諸の凡夫の境界であるといふ。これは蓮華の形をした心から実際に人間の認識、行動が起るまでの過程を起信論教理と合わせる形で説いたものである。

これに対して原は、これは所依を論じてはいるが、未だ本末、源支を詳らかにしていない。私の『心識論』には具体的にこれを明らかにしているといふ。

「雜華嚴經一乗修行者秘密儀軌」は、原は『宗鏡錄』から引用しているが、原本は房山石經にある。そこにはこれが朝鮮半島出身の法蔵という人物の著作であり、その内容は華嚴教学、密教、大乘起信論、中国固有信仰を合わせた著作であることを以前筆者が研究した。現在は『韓国仏教全書』補遺編に収録されている。

第三に一行『大日經疏』であり、三か所引用される。

第一には、卷十一を指示して「行者、この処において蓮華の形を思え。乃至、汗利陀、訖利陀。一名転ずるのみ」といふが、具体的な引用箇所は未詳である。汗利陀、訖利陀は梵語フリダヤの音写であらう。

第二には、汗栗陀心（フリダヤ）について述べる部分である。その形は蓮花が合わさっているがいまだ敷いていない像のようである。筋脉があり、これに約して八分を成している。男子は上向き、女人は下向きであるといふ。

第三には、阿字に関する言及で、「一切衆心は清浄であるが、無明が蔽塞するので了知することができない。もしその心を清めれば曼荼羅である。方便修定によつてその心が漸く浄まる。心が淨いことのゆゑに阿字が中に現れる。阿字とは即ち一切諸仏の心である。」といふ。

以上、三種の文献を挙げた後、原坦山は次のようにコメントする。

心蔵を心の所依とするので固より取るに足りない。私の『心識論』、『実験録』に具体的にこれを弁じている。これによつて経論の闕典を補なう。

と述べる。つまり、これらは心臓を心の所依としているので論ずるに足りないということである。このことについて『心識論』、『実験録』に具体的にこれを弁じている。これによって経論の欠点を補うという。

原は若い時にオランダ医学の学者であった小森宗二と心のありかについて議論をし、負けたことがあった。その時から独自にオランダ医学を研究し、『起信論』に着想を得た独自の身体論を構想したのであった。よって、この部分は原の仏教論の中で一番力説したい部分であったと思われる。

ここでは『心識論』と『心性実験録』から関連する部分を挙げる。まず『心識論』には前述したように、安政本と明治本の二本があった。ここでは新しい明治本をもとに内容を紹介する。まず凡例で六項目にわたり著作の目的を説くが、ここでは前半の三項目について、それぞれ原文と試訳を掲げる。（『全集』八五頁）

【原文】一、経論師、空談名義、而無実詣、禪者、癡坐暗証、而不識正定、是仏氏之通患也、今欲救之故、撰此。（全集八五頁）

【試訳】一、経論師は空しく名義を談じ実詣無く、禪者は癡坐暗証であつて正定というものを識らない。これは仏教者の通患である。今、これを救おうとするためにこの論文を著わした。

【原文】一、心識之名義、経論多異同、蓋訳師経論師、各随其所解、譬如葉公之愛龍、未免或見鐘為甕、故今不係実験者、不取之。若其以火為冷、以水為熱、為以頭履、以脚仮雖仏説、孰能信之、然則其説之多端、所以不足必拠也。（全集八五頁）

【試訳】一、心識の名義は経論に異同が多い。その原因は、思うに訳師、経論師がそれぞれ自分の理解に従っているからである。これを譬えると、「実際の龍ではなく、絵画の龍だけを愛した」葉公が龍を愛したようなものだ。鐘を見て甕と為すようなものだ。故に今、実験にかからないものはこれを採用しない。もし火を冷たいものとし、水を熱いものとし、頭に履き脚に語るといふことを言つては、それがたとえ仏説であるといつても誰が信じようか。そうであれば多くの説はよりどころにすることはできない。

【原文】一、心識流布之源支等、經論之所不說。今取捨西洋之說者、以係修証之要道也。其部位源支之說、可以取之。至其覺不覺之實體、彼固不知之。豈足謂哉。今非特補仏氏之缺典、復將欲紕理學之錯、知我罪我、其此而已矣。（全集八五頁）

【試訳】一、「体の中に」心識が流布する本源と枝末について等は經論には説いていない。今、西洋の説を取捨するのは修証の要道に関係するからである。その部位や源支の説はこれを採用すべきである。そしてその覺、不覺の實體に至っては、彼ら（西洋人）は本来これを知らないものであるからどうしていうことができるか。今「私は」、特に仏教者の欠点を補い、また理學の錯をただそうとするのであれば、私は自分を罰するであろう。それだけである。

内容に入る。ここでは覺心、不覺心、和合心の三者の定義を見る。『心識論』は本文に自分の註を挟む形で書かれているが、ここでは本文だけを抽出し、それを内容から区切り、試訳と共に掲げる。（『全集』八六頁から九二頁）

【原文】覺心者、靈妙寂照、而具覺知分并應動識智之性。其体非生滅、而周遍法界、性非一異、而有隱顯之相。其於人機也、發源於腦之前髓、支流九对、弥漫全躬。但除毛骨爪齒。何謂九对、曰、一對支流、入鼻根起嗅覺。一三四对、及六对、入眼根起、見覺及轉運。五对数支、散布頰面、七对入耳根起聞覺。八对数支入胸腹肺胃等。九对入舌根、起味覺轉運。若夫至筋肉皮膚、及四肢之末、有覺知轉運之用者、皆此心之支流而已矣。

【試訳】覺心とは、靈妙寂照でありながら覺知、分并、應動、識智の性質を具えている。その本体は生滅するものではないが法界に周遍している。（その本）性は一異ではないが隱顯の相がある。それは人間の中で、腦の前髓から發源して九对を支流して全身に及んでいる。ただ毛骨と爪齒は除く。どういふものが九对であるか。一對の支流は鼻根に入つて嗅覺を起す。二、三、四对と六对は眼根に入つて見覺および轉運を起す。五对の数支は頰面に散布する。七对は耳根に入つて聽覺を起す。八对の数支は胸腹肺胃等に入る。九对は舌根に入つて味覺轉運を起す。もしそれ筋肉、皮膚および四肢の末に至り、覺知轉運の用が有るのは、みなこの心の支流なだけである。

【原文】不覺心者、集質造形之心也。其体不具覺知。起滅變幻、現十界依正之相。華嚴經曰、彼心不常住。無量難思議。

顯現一切色。一切世界中、無法而不造。經中、或謂之質多耶、阿陀那。又稱不覺不知不同器世間。其源亦在後腦及脊髓、而發三十一對支流。集取諸質之精粹、相續形体。

【試訳】不覺心とは、集質造形の心である。その本体は不覺であるが、起滅、変幻して十界依正の相を現わす。『華嚴經』にいう。「かの心は常住ではない。無量にして思議することが難しい。一切の色を顯現する。一切の世界の中において、ものとして造られないものはない。」と。經典の中では、あるいはこれを「質多耶」、「阿陀那」という。また不覺不知不同器世間と稱する。その源は後腦とおよび脊髓にあつて、三十一對の支流を發す。諸質の精粹を集取して形体を相續させる。

【原文】和合心者、念想性慮之心也。此心無別体。覺心和合於不覺、而成此心也。蓋不覺心、流動入覺源、則覺心与之和合。譬如豆汁之和於塩液、而為豆腐、清水之合於塵土、而成濁水。是故如如之覺性、變而成念慮生滅之心也。在凡名意識、在二乘為無漏智、菩薩之般若、諸仏之菩提、皆此心之染淨而已。在腦名八識、在胸腹名六識七識。（七識起於腦流注而至胸腹）【試訳】和合心は、念想、性慮の心である。この心に別の体はない。覺心が不覺と和合してこの心が成立する。思うに、不覺心が流動して覺源に入ると覺心と和合する。譬えると、豆汁と塩液が合わさると豆腐となり、清水と塵土が合わさると濁水になるのと同じである。是の故に如々の覺性が變じて念慮生滅の心となる。これは凡夫にあつては意識と名け、二乗にあつては無漏智とし、菩薩の般若、諸仏の菩提は、みな此心の染淨だけである。腦に在るのを八識と名け、胸腹に在るのを六識七識と名ける。

【原文】且夫三心有純有雜、純覺者、眼睛舌根、及耳鼻之根是也。純不覺者、毛骨爪齒、及草木等是也。餘皆三心之所合成、而和合心消、惑障隨滅矣。覺心離則、動類即死矣。不覺心廢、則形質從壞矣。若夫仏氏之道、在斷和合心焉耳。証契大乘經曰、識体至妙清淨、而為客塵煩惱之所染汚。定慧堅明、能斷流入、則煩惱菩提、猶如昨夢也耳。

【試訳】かつ三心に純と雜とがある。純覺とは眼睛舌根および耳鼻の根がこれである。純不覺とは毛骨爪齒および草木等がこれである。ほかはみな三心が合成したものである。そして和合心が消えれば、惑障は随つて滅びる。覺心が離れれば動類は死ぬ。不覺心が廢れれば形質が從て壞れる。およそ仏氏の道というのは、和合心を斷ずることにあるだけである。『証

契大乘經¹⁰にいう「識体は至妙にして清淨であるが客塵煩惱のために染汚される」と。定慧を堅明にして能く流入を断ずれば、煩惱菩提は昨日の夢のようである。

続いて一八七三年（明治六）成立の『心性実験録』に収録された「三心図解」¹¹の中の三心の定義を挙げる。これはいま見た『心識論』をダイジェストにしたようなものである。
不覚心の定義。

【原文】 以腰髄為根、以脊髄為本幹、生三十一对枝杪、培養身形。

【試訳】 腰髄を根とし、脊髄を本幹として、三十一対の枝杪を生じて身形を培養する。
和合心の定義。

【原文】 不覚心上流入覚源、混淆和合起九对之派流、為諸根之妙用。

【試訳】 不覚心が上流して覚源に入り、混淆、和合して九対の派流を起こすことを諸根の妙用とする。
淨覚心の定義。

【原文】 和合生滅之心識滅尽、而真性清淨寂照無為、非意言之所擬。

【試訳】 和合生滅の心識が滅尽し、真性清淨寂照無為である。これは心や言語の擬することができないものではない。

これらを敷衍しながら説明すると、まず不覚心とは腰髄が根となり脊髄を幹として三十一種の枝杪、おそらく神経であると思われるがこれにより物質的な身体を構成する。ここから不覚心とは煩惱であるとともに物質的なものであることがわかる。次いでこの不覚心が脊髄を伝って上昇して脳にある覚源に入ると、覚と不覚が混じりあい、九対の派流が起る。これが普通の人間のありかたである。そこで修行によって和合心から煩惱を減すると真性清淨、寂照無為になるというものである。

(四) 対文解釈第七と『両訳勝義』

第五に、対文解釈 第七の部分で前述したように、これが『大乘起信論両訳勝義』の頭注のもとになったものであることがわかった。

以上のことから本書は、分量自体は九頁ほどの小冊子であるが、原の『起信論』観を研究する上で重要な典籍であることがわかった。本書は原の『起信論』関係の最初の著作である。最後に本書の撰述意図を考えてみたい。本書は『起信論』全体を七門でまとめているということから、『起信論』全体についての著述か講義が目的ではなかったかと考えられる。すると本書が東京大学の講義と関係するのではないかと思われる。ただ、実際に講義でどのように使われたかは不明である。

五 結語

本稿では従来内容が明らかで放った原坦山『大乘起信論要義七門』について検討を行った。わかったことをまとめると次のようになる。

一、考察の対象とした駒大本は能仁雲外が印刷したもので、内題から原坦山が曹洞宗専門本校で講義した際に使われたものである。一八八二年（明治十五）が印刷した年ではないかと考えられる。

二、本書は明治十三年の東京大学図書館の目録には写本とあることから、当初は写本であったものを能仁雲外が印刷したと推定した。

三、内容は七門からなり、『大乘起信論』の要点を項目として掲げ、対応箇所として法蔵『起信論義記』の丁数を挙げていた。四、特徴的な部分は、冒頭に出される三心異称表、そして第四の諸心所依の部分である。三心異称表は淨覺、不覺、和合という三心の異名をまとめ、図示したものであった。第四の諸心所依は、『撰大乘論』、『雜華嚴修行者一乘秘密義記』、『大日經疏』を引用しながら仏典に説かれている心臓を心の所依とすることを批判し、その代わりに自らの『心識論』、『心性実験録』に依るべきことを説いていた。ここから三心異称表と諸心所依は表裏の関係にあるといえる。

五、本書の撰述意図は、東京大学での仏書講義が関連すると考えた。

以上、本書は原の研究においても重要なポイントであり、日本の近代仏教学にとっても重要な書物といわなければならない。

〈参考文献〉

・一次文献

原坦山『大乘起信論要義七門』（駒澤大学図書館所蔵）

秋山悟庵『坦山和尚全集』（光融館、一九〇九年）

・二次文献

佐藤厚『宗鏡録』巻二十八所引『雜華嚴經一乗修行者秘密義記』について―房山石經刻經『健拏標訶一乗修行者秘密義記』との対照研究―（東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』四一、二〇〇四年）

―「翻刻『高嶺君遺稿』」「印度哲学」…原坦山の東京大学仏教学講義を探索糸口」（『中央学術研究所紀要』五二、二〇二三年）

―「原坦山の東京大学仏教学講義」（駒澤大学仏教学部論集）五四、二〇二三年）

―「原坦山の『大乘起信論』観―『大乘起信論両訳勝義』頭注の分析と『釈摩訶衍論』の重視」（駒澤大学仏教学部研究紀要）八二、二〇二四年）

〈キーワード〉原坦山、大乘起信論要義七門、三心、能仁雲外、曹洞宗専門本校

後注

- 1 佐藤厚「原坦山の東京大学仏教学講義」(『駒澤大学仏教学部論集』五四、二〇二三年)、同「翻刻『高嶺君遺稿』「印度哲学」…原坦山の東京大学仏教学講義を探索糸口」(『中央學術研究所紀要』五二、二〇二三年)、同「原坦山の『大乘起信論』観―『大乘起信論両訳勝義』頭注の分析と『釈摩訶衍論』の重視」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』八二、二〇二四年)
- 2 佐藤厚「原坦山の『大乘起信論』観―『大乘起信論両訳勝義』頭注の分析と『釈摩訶衍論』の重視」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』八二、二〇二四年)
- 3 東京大学法理文学部図書館『東京大学法学部理文学部図書館和漢図書目録』(明治十三年十二月)二頁に「大乘起信論要義七門(原坦山述)一卷 写本 一本」とある。
- 4 渡部清「明治一五年四月出版。著者名として「曹洞宗専門本校教師原坦山述」とある。これは『大乘起信論』の内容の主旨を表の形にまとめたもの。」(『上智大学哲学科「哲学科紀要」二四、一九九八年』一二二頁)
- 5 能仁雲外撰『新撰洞上仏事錦囊』(仏教館、一九一三年)例言一、二頁
- 6 『大呉市民史 明治篇 本編』(『大呉市民史』刊行委員会、一九七七年)二九六頁。
- 7 「主海神王」は卷二(大正蔵三三・六〇三上)に「生滅一心主海神王」として説かれる。「与行与相如来蔵」は卷二(大正蔵三三・六〇三下)に説かれる。
- 8 佐藤厚「宗鏡録」卷二十八所引『雜華嚴經一乗修行者秘密義記』について―房山石経刻經『健拏標訶一乗修行者秘密義記』との対照研究―(『東洋大学東洋学研究所「東洋学研究」四一、二〇〇四年』)
- 9 仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』卷一〇(大正蔵九・四六五下)「彼心不常住、無量難思議、顯現一切色、各各不相知、猶如工画師、不能知画心、当知一切法、其性亦如是、心如工画師、画種種五陰、一切世界中、無法而不造。」の傍線部。
- 10 地婆訶羅訳『証契大乘經』卷上(大正蔵一六・六五五中)
- 11 『原坦山全集』一〇八頁